

特別支援学校(肢体不自由)小学部において教育課程の研修会を実施した効果

～教育課程編成を担う一員としての教員の意識醸成を目指して～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

氏名 城倉 朋子

1. A特別支援学校(肢体不自由・小学部)の現状と課題

近年、肢体不自由特別支援教育において、児童生徒の実態の重度化や多様化、そして教員の専門性の課題がある。それはA特別支援学校(肢体不自由)の小学部においても同様である。教員は、肢体不自由教育の経験が1～3年の者が半数を占めている。重度重複障害児の教育では、児童の実態を理解することと、それに応じて学習内容を考えることという二つの難しさがある。

また、特別支援学校のカリキュラム・マネジメントにおいては、個々の児童の学習の状況が重要な要素である。つまり、児童の状態に合わせて教育課程編成を柔軟に見直すことが可能であるが、教員は日々の実践が教育課程の評価につながっている認識が薄い様子である。

現状として「児童の実態の多様化」と「教員の経験不足」があり、そのことにより授業内容や日課表などの「教育課程が児童たちに合っていない」懸念と、「教員の専門性が身につけにくい」課題がある。

2. 研究目的

この二つの課題を解決するための方法として、教員が児童像の理解や重度重複障害児の教育の内容について学ぶ機会を作る。そして、教育実践をしている教員たちで現在の児童に合った教育課程編成を考える、という取り組みを行う。

教員が自校のカリキュラム・マネジメントの一端を担う取り組みを行うことで、自校の教育内容と自分の日常の実践とがかかわりあっているという自覚を持つことを本研究の目的とする。

3. 課題解決の方法

「新学習指導要領の実施に向けたカリキュラム・マネジメントは、組織的な専門性向上、教員の意識改革のための絶好の機会になる」(庄司; 2018)ことを踏まえ、課題解決の方法として研修会を実施する。研修は、全10回行い、「学習指導要領を読み、自立活動の指導プロセスを確認するなど、学校教育として定められている定義や方向性を確認する」という大きな枠組みを知るものと、「受け持ちの児童たちの自立活動のねらいを考え、普段行っている授業のねらいや内容について検討する」という具体的に理解できるものを、つながりを持たせながら

構成する。次年度の教育課程編成を担当たちで考える取り組みも行った。(図1)

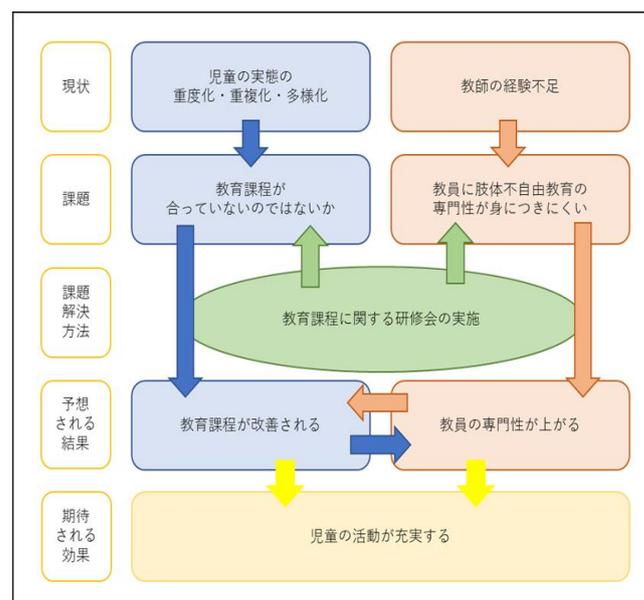


図1 A特別支援学校小学部の現状と課題、及び課題解決方法と結果と効果

4. 結果と考察

課題解決の評価は、教員に対してのアンケートと、児童の学習状況の観察によって行った。アンケートからは教員の肢体不自由教育に関する知識が増えたことや、自分の実践と小学部の教育課程にはつながりがあると感じられるようになったことなどが読み取れた。

結果として、「教師に力(専門性)がある」とことと「教育の内容を改善する判断ができる(教育課程が改善される)」ことは同等ではなく、「教師に力(専門性)がある」ことがまず必要で、そうすることで「教育の内容を改善する判断ができる(教育課程が改善される)」という構図になるということが考えられた。

参考文献

一木薫(2012) 重複障害教育におけるカリキュラム研究の到達点と課題. 特殊教育学研究, 50

庄司伸哉(2018) 『肢体不自由校の専門性向上』肢体不自由教育 237. 2-3

文部科学省(2018) 特別支援学校学習指導要領 他